

# 偉大なる剣士死す、 津村耕作元剣道部監督

～人材残した54年間、弔問1000人超～



稽古を見守る津村先輩

中央大学名誉教授、元剣道部監督で  
剣道教士八段の津村耕作氏が4月23日死去した。  
72歳だった。

26歳の1965年から94年3月まで中大剣道部監督。  
09年4月からは同部長を務め、  
全日本学生剣道優勝大会を7度制した。  
津村先輩の功績と人柄を  
教え子の北原修監督(法学部事務室)に取材した。



## 【評伝】

20年ぶりの再会でも、名前をフルネームで覚えていて、昨日会ったばかりのように声を掛ける。「真似のできないことです」北原監督が静かに話した。

中大OB・OGの名前はもちろん覚えている。教えを請う中高生にも同じ視線に立った。誰とでも真剣に向き合う、その姿勢に多くの人が師と仰ぎ感謝した。

指導は学生の長所、個性を伸ばした。強制的ではなく、考えさせる。ヒントは与えるが、答えは出さない。教えたがりの人が多いなかで希有な存在。卒業後も生きる教えを貰った。考える剣

道が学生チャンピオン7度の偉業をもたらした。

最期まで剣を持った。学生と剣を交え、OBと一本勝負をした。「大事なのは力ではなく間合いです。70歳と20歳

が戦えるのも剣道ならではの」(北原監督)。

エピソードで欠かせないのが、剣道部恒例の夏季合宿だ。1週間の合宿最終日の納会で寸劇を披露する。津村



楽しい寸劇の1シーン



北原修監督



先生が創案した。文武両道ならぬ、“文武芸道”を推奨した。

指導者も舞台に立った。学生4班、指導者1班。観客となる合宿関係者、父兄らの審査で優勝が決まる。

毎日激しい剣道の稽古後、夜に2時間ほど寸劇の練習。よいものを創ろうと意見を交換する。コミュニケーション力向上の目的もあったという。それが就活でプラス要素になったという学生が多い。

ユーモアにもあふれ、「おれは死ぬまで主人公だ」と譲らなかった。アドリブが飛び交うと場内は大いに沸く。観客は中大剣道部と中大のファンになり、一同楽しいお酒で締めくくる。

4月28日の告別式（東京・芝の増上寺）は、就職活動中の4年生が手伝い、弔問客は千人を超えた。弔辞は福原紀彦総長・学長が読んだ。地方や海外で合掌した人も数多くいた。

「交剣知愛」

誰とでも真剣に向き合った。津村先生が、好きな言葉だった。

（学生記者＝山口莉奈 経済学部2年）



## 母と私

取材後記

母は、自分のことを話しながらいない人だった。

私が大学進学を控え、母の出身校を聞いてもはぐらかした。私の中大入学が決まると、母は中大剣道部にいたと明かした。北原監督の取材中、びっくりしたあの時を思い出した。

剣道とは不思議なものだ。親は子に、子は自分の子に、剣道を習わせたいと思わせる。

区報にあった警察署主導の剣道教室生徒募集を見て、母は私を連れて道場へ。ごく自然に竹刀を握り、気づけば道場に通うことになっていた。

母の剣道は、大学入学後しばらくたって、サークルは何に入っていたの、と尋ねたのがきっかけだった。道理で剣道に詳しいわけである。それがまさか、

津村先生と接点があったとは…。

今回、「交剣知愛」という言葉を思い出した。今ならあの頃、剣道の相手をしてくれた母の気持ちがわかる。

（山口莉奈）

## 新時代、中大剣道部

中央大学剣道部は、新たな時代に突入した。

北原監督に引き継がれても津村先生の想いを失うことなく、北原監督と学生が作り上げる新しい歴史が積み上げられ、これからも大きく発展していくことだろう。

高校生には中央大学剣道部にぜひ行きたい、と言ってもらえるよう。中大剣士には自分で答えを見つけ出せるよう。指導は続く。愛される剣道部はここに所以があるのだろう。

（写真提供＝北原修氏）

### 中大剣道部・競技&練習日程

7/7～8	全日本学生選手権大会・男女	日本武道館
8/17～23	夏季全員合宿	佐賀県三養基高校
8/27～	試合前強化練習	
9/9	関東学生優勝大会	日本武道館
9/15	関東女子学生優勝大会	東京武道館
10/7	後期OB&現役稽古会	日本通運
10/28	全日本学生優勝大会	大阪
12/1	関東女子学生新人戦大会	東京武道館
12/9	関東学生新人戦大会	東京武道館